

花柳界に新たな息吹を

山形芸妓
菊弥さん



幼稚園のころです。テレビで京都祇園の舞妓さんの可愛らしい姿を見た瞬間、「私は中学を卒業したら舞妓さんになる！」一。そう心に決めました。元々が芸事の血筋のようで、祖母の小菊姐さん

は90歳の今も現役の地方(じかた)さんで、そのお姉さんは稀音家(きねや)六松喜という芸名で知られる三味線の名手でした。母は日本舞踊を習っていたし、茶の間の話題は歌舞伎の事。私も坂東玉三郎、新之助時代の市川海老蔵に夢中になっていました。

そんな環境に育ったのですから習い事をしていたと思われがちですが、そうではありません。姉2人は三味線の稽古をしました。でも、末っ子の私は忘れられた存在。姉が見たという芸妓さんたち総出演の三島神社の祭りも知らないし、第一祖母が芸妓さんであることすら後で知ったのですから。それが今、お座敷に出ているのですから不思議です。

「祇園の舞妓さんに」という願いは、両親が反対

し憧れだけで終わりました。ところが平成8年、高校卒業の年に山形伝統芸能振興(株)が設立されたのです。舞子を募集するという話を聞き迷わず応募、親も今度は賛成してくれました。第1期生は7人。その中に関東方面の交通機動隊で白バイに乗っていた方もいたようです。もっとも採用決定後に辞退したため顔を合わせる事ができなかったのですが。

舞子は8年務めさせていただき花柳界をいったん離れました。芸事が一人前にできて初めて芸妓と名乗れます。そのころの私は技芸も気持ちも中途半端。「こんな状態では絶対にこの世界でやっていくのは無理」と思い、学校に通ってパソコンの資格を取り、県庁で事務の仕事に就きました。

そんな私に舞子時代を知っている方々が「戻ってきたら」と声を掛けてくださいました。街を歩いていて三味線の音色が聞こえるたびに「戻りたい」という思いに火がつかしました。「芸妓の道は茨(いばら)だけど気持ちがあれば。戻るなら今だよ」と清元美多郎師匠がおっしゃってくれました。長唄の吉住小登江師匠のお宅で「生涯稽古」と書かれた額を見て、「ここで終わりでない、終わってはいけない」と、復帰を決断しました。

山形芸妓は祖母や小蝶、金太、二郎姐さんが花柳界に入った時は50数人。それが今では私を含めて6人です。料亭文化という存在が一般の方には馴染みが薄くなり、また、芸妓は自営業のようなもので、舞子から芸妓へ進むのは容易なことではありません。会社ができて18年、芸妓になったのが私1人という数字が物語っています。

でも、今年4月、多くの方々のご理解を得て、山形芸妓育成支援協議会が設立されました。山形の料亭文化、花柳界の灯を絶やさず、山形の観光を演出する存在として期待が掛けられていることと思います。

祖母からは「お客様からほめられたら、けなされたと思いき進しなさい」と教えられています。昔ながらの良いところは守りつつ、新しいものも吸収していかなければと思っています。京都に行ったり、赤坂の芸者のお姐さん達と共演させてもらったりしながら、県外の花柳界についても勉強しています。地方の技術もしっかりと磨いていかなければいけないですね。私の存在が後輩たちの励みとなり、一緒に花柳界を盛り立てていけるようになれば嬉しいです。